

茶の湯 文化学会 会報

第105号 / 2020年6月25日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
http://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

茶の湯研究によせて

中村修也

令和二年はまさに新型コロナウイルスの感染で始まり、「2020」と銘打っていた東京オリンピックも延期となり、わが茶の湯文化学会の大会・総会も中止となりました。各流派の催し物も多くが中止となっていることと御察し申し上げます。

世界中がコロナ一色となり、在宅リモートが普及しました。IT社会と言っている、日本ではまだまだネット講義、ネット会議は未発達でした。しかし、この新型コロナウイルスの感染影響で、意識だけかなり進みました。次に来るのは実際のIT化ではないでしょうか。会社社屋を必要としないIT社会がもう目の前に近づいています。アメリカのミネソタ大

学は、学生はみな寮生活を共にしており、十八名でひとクラスを構成し、その授業は全てオンラインで、教授の側が世界各地からオンラインする大学です。このような大学も増えてくることでしょうか。教育のありかたも変化する時期にきているということですね。

そうしたなかで、伝統文化にかかわる茶の湯や美術といった世界はどのような対応をしていくのでしょうか。ある意味愉しみですらあります。「伝統文化」という言葉は、本来は存在しません。伝統という言葉に文化という言葉をつけ足して造語したものです。伝統という言葉は、「古くからのしきたり・様式・傾向・思想・血筋」など、有形無形の系統をうけ伝え

ること」を意味します。また文化は、「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの」です。それゆえ、茶の湯は「文化」と表現するべきものであると私は考えています。しかし、茶の湯はひとつのものではありません。さまざま茶の湯があると考えています。流派による茶の湯もあれば、個人で楽しむ茶の湯もあります。点前作法を重視する茶の湯もあれば、道具を楽しむ茶の湯もあり、無手勝流に楽しむ茶の湯もあります。また、接待を主とする茶の湯もあれば、一人で楽しむ茶の湯もあります。すべて茶の湯なのです。

『茶の湯文化学』の前身である『研究と資料 茶の湯』の第一号に「はじめに」として次のように書かれています。

従来の茶湯研究は膨大なものがあるが、大きく分けて三つ

のタイプがある。一つは茶人自身の自己学習の結果を著述したもの。第二は茶の世界の外から茶湯批判として出された茶湯研究。第三は日本文化研究を目的とした研究者がその素材として茶湯をとりあげた研究である。

として、基本的には第三のタイプに属するけれど、「第一・第二の明確な目的意識を同時に汲みあげて行かねばならない」としています。それは、第三のタイプに専従すると「文化創造活動としての茶湯の今日的意義を捨象して」しまいがちであるからであるとされています。つまり、茶の湯の研究は、学問的にとどまらず、その成果を茶の湯の文化創造に寄与させることが必要だと考えていたわけです。

この考え方はとても崇高な目標を掲げています。まさに研究と実践が融合する形を目指しているのです。しかし、実践の立場と研

究の立場は異なります。一緒に話し合い、考え合うことが出来るのもっともいいのですが、どうしてもそれぞれの立場で物事を考えてしまいます。たとえば、歴史学の立場で流派の歴史上の人物を取り上げた場合、いろいろな立場で考えることができます。肯定的に捉える人、否定的に捉える人、さまざまです。研究という立場で考えると、それぞれの立場を尊重しなければなりません。ところが、流派の立場ですと、自分たちの流派の先祖に関しては、肯定的な立場で物事を考えがちです。そこには軋轢が生まれやすくなります。この流派の立場を勘案すると、自由な研究は不可能になります。しかし、研究というものは、自由であるべきで流派の立場を考えるとできません。そこが難しいところです。たとえば、千利休を尊敬していても、研究上、利休のある事象について突き詰めていくと、流派が伝えている事柄を否定する結果

を発表することもあります。それが事実かどうかは、研究者が議論を重ねることでは結論はできません。事実の場合もあれば、そうでない場合もあります。ですが、流派の人にしてみますと、利休の事績を否定した結論を発表した研究者はあまり受け入れたくない存在として認識されます。こうなると、たいへんまずいことになります。それから歴史上の人物をかんなに理想化することが及ばず影響というものも考えなければなりません。たとえば、戦国時代の千利休は堺の商人です。職業は商人なのです。けっして職業は茶人ではないのです。戦国時代に職業茶人という人がいたかどうかわかりませんが、江戸時代には存在します。つまり、利休が茶人としてどう考えたかという設定はむずかしいのです。なぜなら利休は商人だからです。たとえば、近代数寄者の代表的人物である益田鈍翁は企業家として知られています。鈍翁は茶

人です。しかし、三井財閥を築いた人物の一人です。この時、鈍翁の考え方を茶人としての考え方で設定するかというと、これはしません。近代企業家としての考え方で設定します。千利休の場合も同じように堺の商人として考えなければなりません。つまり、私たちは流派の祖や中興の祖について、流派が伝える伝説的な部分と史実の部分に分けて考えなければなりません。

一方、流派がもつ伝説が間違いと決めつけて、それを不要だといふ必要はないのです。伝説は、それが持つ意味があります。長い年月、その伝説を持ち続けてきたこと自体が歴史となっています。その流派が現在まで存続してきたのには、その流派の伝説が果たした役割があるからです。

それゆえ、流派の方々には、研究者が論じる歴史的な事実を認めていただき、流派を否定しているのではないと御理解いただきたい

と思います。また、研究者の方々には、流派の人に阿るのではなく、純粋な立場で、研究に勤しんでいただきたいと思います。

その意味では、現在は茶の湯文化学会は危機的な状況にあるといえます。年々茶の湯人口が減少してきて、会員数も減少しています。茶の湯研究の第一世代が、『茶道古典全集』が発刊された世代とすれば、茶の湯文化学会の成立時期が第二世代といえるかと思いません。第二世代は研究に革新的な発展がありました。建築史・美術史を含め、大きな流れが形成されました。ある意味、茶の湯史の概説が生み出された世代です。茶の湯自体も大きく成長し、『研究と資料 茶の湯』に書かれていたように、実践と研究の融合を目指そうという意識が生まれるほどでした。社会自体も経済的發展を遂げ、日本全体がものすごく発展的だった時代といえましょう。歴史学会も右肩上がりでした。しかし、リー

マンショック以降、世界は不況に陥り、日本はデフレ・レシジョンから脱していません。第二世代とともに茶人になられた方々もお年を召されてきました。社会全体が右肩下がりに陥っています。

さて、私は六代目の会長に就任することとなりました。初代中村昌生会長から、五代目の中村利則会長まで、素晴らしい研究者の方々が会長を経てきています。ことに四代目の熊倉功夫会長は、私の恩師です。茶の湯のいろはを熊倉会長から教わったと言っても過言ではありません。「永世」会長として君臨してほしかったと思っております。しかし、先生の御業績からいって、茶の湯文化学会だけが先生を独占するわけにもいかず、先生の御年齢を考えますと、もっと広い世界での活躍を期待して、辞任を受け入れざるを得ませんでした。五代目会長の中村利則先生は御体調を崩され、就任間も無い頃に辞退の運びとなりました。

た。その時、副会長をしていた関係から会長代行となり、そのまま会長に推薦されるという流れで私が会長になったに過ぎません。とても先人たちの足もとにも及ばない私にながでできるかと考えただけで身の縮む思いがします。

会員数の減少は抑えられにくい現状です。私にできることはほとんどないのでないかと悩む毎日です。再び、和食を世界無形文化遺産に登録した熊倉会長のような著名な研究者がいつまでも会長で居られる方が、よほどいいのではないかと何度も思い悩みました。しかし、がんばるしかありません。なんとか、会員が減少しても学会を学会たらしめるべく、研究と実践を分けて、若い人たちが新人の方々に研究を続けていただければと考えています。研究と実践を分けてといっても、まったく分離させるわけではありません。実践の場からの問題提起も取り上げたいと考えています。会誌のレベ

ルもできるだけ落とさぬようにしながら、がんばりたいと思っております。大会も研究発表だけでなく、茶の湯の実践も行う場として活用できればと考えています。また、IT化社会に対応させるために、学会のホームページの充実を図りたいと考えております。各地の例会の様子などもホームページやFacebookなどを利用出来たらいいのではないかと考えております。少しずつですが、前向きに進んで行ければと思います。そのためにも会員の皆様の御協力をお願いいたします。存じます。なにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

令和二年度総会

令和二年五月三十一日(日)に開催予定でありました本年度総会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりました。そのため郵便により議案が諮られました。その結果、(第一号議案)

令和元年度決算(案)及び令和二年度予算(案)の件、(第二号議案)

中村修也会長代行の会長選任の件につきまして、会員総数六百九十九名のうち四百十五名のご回答があり、いずれも承認の意思が示されたことをご報告申し上げます。

なお返信にあたって、会計監査の有無と、事務消耗品費の予算に比しての大幅な増額決算、会員名簿の作成の三点についてご質問がありました。会計監査につきましては、筒井紘一氏(令和二年四月二十七日)と吉永清志氏(令和二年四月二十七日)により厳正な監査が行われました。事務消耗品に

つきましては、当初計画になかった会報第一〇〇号発行記念による会報および封筒のデザイン一新のデザイン料が支出されたためです。会員名簿の作成につきましては、次回理事会の議案といたします。以上、ご報告申し上げます。

例会

東京例会

(令和元年十二月十四日)

「移送の名物記『唐物凡数』」

―その意義と『山上宗二記』

竹内順一

紹興時代から利休時代まで三種の名物記の成立年代差は、わずか三十余年であり、急速に茶の湯が変化を遂げたことを伝える。『清玩名物記』が多様な道具を過不足なく網羅するのに対し、『山上宗二記』は評価する道具とそうでないものとの差異が著しい。これを「侘び茶の深化」と見れば『唐

物凡数』は、二つの名物記の間にあって移送(トランスファー)の役割を果たしたとみなすことが可能だ。三種の名物記はあたかも「序破急」の関係にあったと喩えることができる。

本発表では、三種の名物記すべてに登場する「大壺」を中心に取り上げる。『清玩名物記』には計二十九点の大壺があり、そのうち「白雲」「玉虫」「深山」「松山」が『唐物凡数』に継承され、新規に「千種」が加わる。そして『山上宗二記』には「白雲」「千種」「深山」の三点が引き続き記載された。このことは「千種」が移送の具体例であったことを伝える。鉄釉系の茶褐色の釉薬がたつぷりとかかる「千種」の特徴は、匳相のあり方を如実に伝えているのではないか。このような鉄釉系の「雄渾な存在感」を論じることが、『清玩名物記』から『山上宗二記』へと発展させた実態を知る手掛かりになると考える。

(令和二年二月二十九日)

「江戸の酒井宗雅」

谷村玲子

姫路藩十五万石第二代藩主 酒井忠以(宗雅)(宝暦五年―寛政二年、一七五五―一七九〇)は、大名茶人松江藩藩主松平治郷(不昧)の門下として知られる。

安永五年正月からの公用日記『玄武日記』と晩年三年間の茶会記『逾好日記』から、宗雅が関係した茶会の総数は五二〇会以上を数える。江戸に生まれ十八歳で姫路藩主となった宗雅が国許に滞在したのは、三十五年の生涯で二年六カ月にすぎず、その茶会の大部分は江戸での会である。天明二年、三年にかけて宗雅は茶に傾倒していき、天明四年(一七八四)の茶会総数は一二〇会を超え、この年の八月に不昧との初会があった。宗雅の茶会には、酒井家、母方の大給松平家、祖父酒井忠恭の娘婿関係、正室の実家である高松藩松平家関係など、親戚諸大名との

例会のご案内

交流がある。さらに大名茶人である松平堯山や朽木綱貞との交流も挙げられる。当時江戸では、川上
不白の茶が流行していた。不白との
交流会は、安永十年の伝法院の会、
天明二年の池田治政の会、天明四
年閏一月に不白を上屋敷に招いた
会の三回が認められる。しかし宝
暦十二年（一七六二）不白が宗雅
の祖父忠恭に参じた会があり、宗
雅の茶友には不白門人の大名・武
家も多く、宗雅と不白との出合い
はさらに早かった可能性がある。

不昧の門人で宗雅の茶友でも
あった蒔田定静（旗本）、井伊直
広（与板藩世嗣）、堀本一甫・桂
川甫周（奥医師）、伊佐栄琢（数
寄屋坊主）は江戸常住の人々であ
る。また宗雅の交流会には、隠居大
名や実弟抱一のように江戸で自由
に暮らす人々もあった。

一八世紀の江戸の宗雅の茶会
が、武家身分の広く親しい交流の
場であったことは明らかである。

湯―」

櫻庭美咲

「文禄期における豊臣秀吉の茶の湯について―葉茶壺の利用を中心―」

上田真紀

※例会の日程・会場等、変更する
場合がありますので、ホーム
ページまたは事務局までお問い
合わせください。

東京例会

二〇二〇年六月二十七日（土）

午後二時

会場：さいたま市文化センター

大集会室

「『古今茶湯集』の史的検討」

依田 徹

「千宗旦の道具にまつわる考察―

道具の選別と享受の実態―（仮）」

荒井欧太郎

二〇二〇年九月十九日（土）

午後二時

会場：未定

「福喜多靖之助著『CHAN-NO-YU

TEA CULT OF JAPAN』―海

外へ伝えられた近代数寄者の茶の

蔵）―空想茶会記を含む桜田事変

関連資料が隠されていた茶書（全
八冊）について―」

岩田澄子

二〇二一年二月二十七日（土）

午後二時

会場：未定

「宗湛日記の茶会における「盆」
の使用（仮）」
作山裕美香

「『南方録』における茶の湯の系譜
―「達磨」と「趙州」を手がかり
に―」

櫻本香織

櫻本香織

東海例会

二〇二〇年七月四日（土）

午後二時～三時半

（開場午後一時半）

会場：昭和美術館

「茶碗（仮）」

伊藤嘉章

伊藤嘉章

「竹川竹斎『川船の記』（射和文庫

二〇二〇年九月十二日(土)

午後二時～三時半

(開場午後一時半)

会場：昭和美術館

「染付について(仮)」

善田のぶ代

二〇二〇年十一月一日(日)

午後二時～三時半

(開場午後一時半)

会場：昭和美術館

「尾張の焼物 (part.三) (仮)」

前田 博

北陸例会

開催日は未定(決まり次第HPに

掲載させていただきます)

午後二時～

「堀口捨己の中柱論」

近藤康子

二〇二〇年九月二十六日(土)

「未定」

二〇二一年三月二十日(土)

「未定」

金沢例会

二〇二〇年七月五日(日)

午後一時半

会場：ITビジネスプラザ武蔵五

階研修室一

「山上宗二記」の諸本」

竹内順一

二〇二〇年九月六日(日)

午後一時半

会場：ITビジネスプラザ武蔵五

階研修室一

「茶道各流派の手前」

廣田吉崇

日時未定

移動例会

高山茶の湯の森見学・料亭「洲さ

き」

日時未定

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

高知例会

二〇二〇年九月二十七日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶

室

岡倉天心『茶の本』第六章輪読

(各自お持ちの本をご持参くださ

い)

二〇二〇年十一月二十九日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶

室

岡倉天心『茶の本』第七章輪読

茶事 正午～午後四時

席主 四名

会費 五千円(参会希望者は予め

連絡をして下さい)

二〇二一年二月七日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶

室

茶書『未定』を読む

茶席 正午～午後四時

茶の湯文化学会の研究成果

を実践する。茶の湯を一般

の方々親しんでもらうた

め「床飾り」「道具立て」

はするが、お点前はお客次

第として楽しめる茶席を設

ける。

会費 三百円

お知らせ

●質問を募集します

会員のみならず茶に関する

学問的な質問を募り、質問内容に

近い分野の研究者が、これに紙面

上で回答するという企画です。

この質疑応答を通して、会員相

互の交流をより密なものにする

とともに、最新の論点を含む知識を

得る場を設けたいというのがおも

な目的です。

どうぞふるってご質問をお寄せ

下さい。